

「夜」と「兄弟なる太陽の賛歌」

—エロワ・ルクレールによるナチスへの抵抗—

手塚 奈々子

はじめに

第2次世界大戦下でヒトラー率いるナチスに抵抗した証しとして、ノーベル賞受賞者エリ・ヴィーゼル、ヴィクトル・E・フランクル、D・ボンヘッファー、M・コルベ神父、エディット・シュタインのもの等存在するが、もう1人—日本ではあまり知られていないが、西洋では知られている—エロワ・ルクレール（Éloi Leclerc, 1921-2016. 以下ルクレールと表記）というカトリックのフランチェスコ会（OFM）司祭の証しも存在する。

ルクレールは、強制収容所から生還した後、司祭活動をしながら哲学を教授、そして証しとして執筆活動を行った。その多々ある書物の中で、ナチスの強制収容所へ向かう列車の中での体験が彼に決定的な影響を与え、この記憶に生涯戻っている。仲間と共に収容所に向かう列車の中で、ナチスによるあまりにも過酷な状況によって1人の仲間が亡くなる時、残る仲間と共に、彼らの修道会の創始者アッシジの聖フランチェスコの「兄弟なる太陽の賛歌」が、自然と自分たちの唇にのぼってきたという体験である。そしてこの時の体験を基にして、彼は「神が神であるよう

に！それで十分！」と生涯言い続け、人間の中にある「自己絶対化（自分が神になること）への欲望」に抵抗し、真の貧しさ（フランチェスコの貧しさとは物質的な清貧の意味もあるが、その一番根底にあるのは物も人間も「所有しないこと」である。下記ルクレールの省察及びフランチェスコ研究者 Claudio Leonardi の論文⁽¹⁾ 参照）を説き続けた人である。

彼は、この強制収容所へ向かう時の壮絶な過酷な体験及びそれに近いものを「夜」と呼ぶ。このような体験を「夜」と呼ぶのは、エリ・ヴィーゼルの『夜』をはじめ、フランクルの『夜と霧』等で知られているが、ルクレールに顕著なのは、「夜」とアッシジの聖フランチェスコの「兄弟なる太陽の賛歌」との結びつきである。彼がフランチェスコ会士であること以上のものがここにはある。

フランチェスコの「兄弟なる太陽の賛歌」は、一般的な解釈では、被造物全体を兄弟姉妹とし、被造物の美を通して創造者である神を讃えるものであり、「被造物の賛歌」とも言われる（自然を兄弟姉妹と呼ぶフランチェスコは「環境保護者たちの聖人」ともされている）。なお、この賛歌の後半には「姉妹なる死」もとりあげられており、その解釈は豊かにある。

一般的な解釈によれば、明るく、美しく、嬉しく、喜ばしいものであるこの賛歌を、ルクレールは、ナチスに殺される仲間の死際にすなわちこの闇の「夜」に口ずさんだことに、彼自身驚いている。と同時に、その意味を彼は生涯問い続け、書き続けた。

このルクレールの見出した意味が、今日の世界でも（ナチスの問題はあの時で終わったものではない。今日もある）考えさせられるものなので、本稿で、1「兄弟なる太陽の賛歌」、2：1「ルクレールの体験と省察—インタビューから」、2：2「ルクレールの体験と省察—書物から」、2：3「〈夜〉と〈太陽〉」、そして「おわりに 現代教会に問いかけるもの」

として論じる。

1 「兄弟なる太陽の賛歌」

ルクレールは、フランスのフランチェスコ会（OFM）に属していた司祭である。彼の主張を省みる前に、フランチェスコ会の創始者である13世紀のアッシジの聖フランチェスコ及び彼の作った「兄弟なる太陽の賛歌」について一般的に紹介する。アッシジの聖フランチェスコそしてその「兄弟なる太陽の賛歌」は、フランチェスコ会の霊性そのものである。

アッシジの聖フランチェスコは、イタリア中部のアッシジで1181年（あるいは1182年）に生まれ、同地で1226年に亡くなった修道士である。1209年（あるいは1210年）「小さき兄弟会」（通常フランチェスコ会と呼ばれる）を創立した。現在アッシジは彼ゆえに世界遺産に登録されている。彼は人間だけでなく自然を愛し、その愛ある生涯ゆえに1228年列聖され、1939年イタリアの守護聖人とされ、1979年には環境保護運動者たちの守護聖人とされた。13世紀、十字軍の時代に武器を持たず聖書を持ってイスラム圏に自ら出向き、そして会の修道士たちをも出向させた。宗教の違いを超えるその彼の平和な生から、1986年ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世は、世界初の諸宗教間対話の場をアッシジで開催した。そしてアッシジの聖フランチェスコ大聖堂と京都の高山寺との間に、宗教の違いを超えた世界初の「兄弟教会」の契りを結んだ。（高山寺のパンフレットには、「兄弟寺」ではなく、「兄弟教会」と書かれてある）。フランチェスコは「もう1人のキリスト」とも呼ばれ、また、その親しみやすい人柄から世界中の人々に愛され、専門的な研究書だけでなく一般的な書物そして彼に関する映画も数本できている。虫一匹殺さないフランチェスコの感性（彼の愛理解は人間にだけでなく自然にまで及ぶ）により、エコロジーの面から20世紀に注目されたが、キリス

ト教史上において「神と人間の関係」だけでなく「神と人間を含む自然」を大切にすることで知られ、キリスト教の聖人たちの中でも、自然豊かな日本でも好まれ、彼に関する書物は比較的多く和訳されている。

一般に自然への愛が表れているものとして有名な「兄弟なる太陽の賛歌」は、母国語（イタリア語の中のウンブリア方言）によるキリスト教史初の宗教詩であり、「被造物の賛歌」とも言われる。以下、全文和訳を掲載する。（一部筆者改訳）

アッシジの聖フランチェスコ作「兄弟なる太陽の賛歌⁽²⁾」(「被造物の賛歌」)

いと高い、全能の、善い主よ、賛美と栄光と誉れと、すべての祝福はあなたのものです。

いと高いお方よ、このすべては、あなただけのものです。だれもあなたの御名を 呼ぶにふさわしくありません。

私の主よ、あなたは称えられますように、すべてのあなたの造られたものと共に、わけても兄弟である太陽卿と共に⁽³⁾。太陽は昼であり、あなたは、太陽で私たちを照らします。

太陽は美しく、偉大な光彩を放って輝き、いと高いお方よ、あなたの意味を担っています⁽⁴⁾。

私の主よ、あなたは称えられますように、姉妹である月と星によって。あなたは、月と星を 天に明るく、貴く、美しく造られました。

私の主よ、あなたは称えられますように、兄弟である風によって。また、空気と雲と晴天と あらゆる天候によって。あなたは、これらによって、ご自分の造られたものを 扶け、養われます。

私の主よ、あなたは称えられますように、姉妹である水によって。水は有益で謙遜、貴く、純潔です。

私の主よ、あなたは称えられますように、兄弟である火によって。あなたは、火で夜を照らされます。火は美しく、快活で、たくましく、力があります。

「夜」と「兄弟なる太陽の賛歌」

私の主よ、あなたは称えられますように。私たちの姉妹である 母なる大地によって。大地は、私たちを養い、治め、さまざまな実と色とりどりの草花を 生み出します。

私の主よ、あなたは称えられますように。あなたの愛のゆえに赦し、病と苦難を 耐え忍ぶ人々によって。

平和な心で耐え忍ぶ人々は 幸いです。その人たちは、いと高いお方よ、あなたから 栄冠を受けるからです。

私の主よ、あなたは称えられますように、私たちの姉妹である 肉体の死によって。生きている者はだれでも、死から逃れることはできません。

大罪のうちに死ぬ者は 不幸です。あなたの、いと聖なる御旨のうちにいる人々は 幸いです。第二の死が、その人々を そこなうことはないからです。

私の主をほめ、称えなさい。主に感謝し、深くへりくだって、主に仕えなさい。

なお、この賛歌は、映画“Brother Sun, Sister Moon”のメインテーマにもなり、カトリック教会の聖歌として現在各国語で歌われている。

2：1 ルクレールの体験と省察—インタビューから

1945年ルクレールらフランチェスコ会士たちも、反ナチスのプロパガンダとされ、ナチスの強制収容所に送られる。この時の「夜」の体験を彼は様々な書物で書いているが、まず晩年の彼へのインタビュー⁽⁵⁾からこの「夜」の体験についての彼の生の声を和訳し、その後で彼の主張を考察するために、彼の書物から同じ体験を和訳する。

「私たちの死刑執行人の目には、私たちはもはや人間ではありませんでした。彼らの目的は、私たちが今やもういかなる尊厳も持っていないのだということを意識させることでした。それゆえ私たちには何一つ敬意に値する権利もありませんでしたし、ましてや命への権利もありませんでした。人々は、1人また1人と死

んでいきました。それは、狂暴な力の国でした。⁽⁶⁾」

「私たちの車両には、4人のフランチェスコ会の兄弟がいました。私たちの1人は臨終に臨んでいました。彼のまなざしは既に消えていました。去りつつありました。ところが、死につつあった時、天が開かれました。自発的に私たちの唇に、アッシジの聖フランチェスコの〈兄弟なる太陽の賛歌〉があがってきました。そして私たちはこれを歌いました。こんな瞬間にどうしてこの歌を歌うことができたのでしょうか？

しかしながら、私たちが生きていた中で、甚だ適する唯一の言語だと私たちに思えました。私たちの声は、人がかろうじて聞けるものでした。微かな息のようにあがっていました。確かにこれは、列車と運命の進行によって打ちのめされた声の糸でした。しかし、これは宇宙の歌でした。私たちは被造物の輝き、光、命、そして宇宙的な人間的な偉大なる兄弟性を歌っていました。目に見えない力が私たちを導いていました。私たちの中で歌うのは、この力でした。⁽⁷⁾」

「この歌の中に表されていた目に見えない力が、あの時1つの神秘のように私たちの運命を生きさせていました。…しかし、問いは手つかずのままでした。なぜこんな人間の悲慘があるのか？そして、この悲慘の中でどうして突然アッシジのフランチェスコの〈兄弟なる太陽の賛歌〉なのか？この問いは、私に全生涯に渡りました。

このようにして、放棄と絶望への招きだったことが、神のおかげで私にとっては、フランチェスコのインスピレーションの深化と新たな展開の出発点になりました。⁽⁸⁾」

そして、自分の書物の意味及び省察を語る。

「私の文章の産物は、大部分次の2極間の緊張と内的対決から生まれたと言えます。すなわち、一方で人間の悲慘の体験、他方でフランチェスコのインスピレーシヨ

「夜」と「兄弟なる太陽の賛歌」

ンつまり人々の間における真の兄弟性への招きです。⁽⁹⁾

「人間も宇宙の断片ですから、生命の力（リビドー、攻撃性）によって支配されるものです。この力は、死の力に傾かないように、飼い慣らされることを求めています。

世界の中でのフランチェスコ的な現存とは、ポール・リクール表現によれば、〈兄弟の緊張の中にあるあらゆる敵意を創造の一致の内面に回心させること〉にあります。すべてこれらの力を〈霊化する〉役目が人間にあります。…人間の本義は、これらの力を抑えることにあるのではなく、これらに善に向かう・霊に向かう・美に向かう方向付けを与えることにあります。⁽¹⁰⁾

フランチェスコの「兄弟なる太陽の賛歌」については、次のように語る。

「“水”，“風”，“火”は、私たちに潜む隠れた力を象徴しています。しかし、これらの力は、〈賛歌〉の中であらゆる破壊的性格を失っています。フランチェスコは、被造物への自分の愛情を表現するだけでなく、自分の内なる隠れた力との和解をも表現しているのです。そして、この和解なしには、人は他の人々との関係に入ることはできません。

アッシジのフランチェスコ、あるいはシャルル・ド・フォーは、すべてこれらの力をとらえ、これらを愛の、一致の力にするのに熱心な人たちでした。もし人がこの方向付けに専念しなければ、これらの力は無駄なままに留まり得、あるいは破壊の力になり得ます。人間的な兄弟性と宇宙的な兄弟性は、分けられざるものです。

人が自分の同胞を尊敬し彼を自分の兄弟と考えるに至るためには、〈人権〉を宣言するだけでは十分ではありません。霊的な偉人たちは私たちに救いの道を示しています。すなわち、“人”は“人”を超えなければなりません。すべての造られ

たものに対する創造者の愛に自分を開かなければなりません—最も小さな被造物に至るまで。⁽¹¹⁾」

彼は、「神」が「神」であり、人間は神になれないことを語る。

「フランチェスコの宇宙的な兄弟性は、その特有の泉を持っています。これは、直接フランチェスコの創造への感受性に関係しています。そしてこの感受性はあ
る親密な体験と合体しています。至高なる神に対して、フランチェスコは被造物
の自分の状態という良心を取り、そしてこの状態を無条件に受け入れます。神の
みが神です。⁽¹²⁾」

「私たちはあまりにも中心的すぎます。私たち自身にうずくまりすぎます。これ
ゆえ止むことなく私たちは解放されているようにならなければなりません。私た
ちの人生の中で神が神であるようにさせていなければなりません。…これは決し
て終わることがありません。

〈神はおられる〉—これを言う必要があります。そして私たちは、神が全能であ
るだけでなく、あらゆる善意、あらゆる善でもあるということを知っています。
聖フランチェスコが言っているように、神はすべての善であり、善良さそのもの
です。(FF70, 261 他) これこそ、なぜ〈神はおられる。これで十分〉であるかで
す。それは、継続的に再開し再生すべき解放なのです。⁽¹³⁾」

そして、現代社会に向けて語る。

「強制収容所は、今もあります。そして、同じやり方でなくてもそこで苦しみ続
ける人はいます。神はまさにそこで私たちを訪れ、私たちに平和をもたらしに来
られます。⁽¹⁴⁾」

「夜」と「兄弟なる太陽の賛歌」

「私たちは、神のみが私たちを完全に解放することができるということを受け入れなければなりません。これこそが最高の知恵です。⁽¹⁵⁾」

「心において貧しくあるということは、生き物や物事を所有の対象あるいは支配の対象とは見ないということを意味します。⁽¹⁶⁾」

2：2 ルクレールの体験と省察―書物から

書物の中では、彼は以下のようにこの彼の「夜」の体験を書いている。

「魂の夜の言葉」から；

「私たちの魂の中に闇の夜があった。しかしながら、4月26日の朝、私たちの1人は臨終にあった。そして彼のまなざしの光は私たちをほとんど去りつつあった。私たちの唇に心からあがって来たのは、絶望の叫びでもなく、反乱の叫びでもなかった。そうではなく、歌だ。そしてそれは賛美の歌だった。つまり、アッシジのフランチェスコの〈太陽の賛歌〉だ。そして私たちはこれを歌うのに自分たちを強いる必要すら本当になかった。この歌は自発的に私たちの夜からほとばしり、私たちの窮乏から、出来事に見合った唯一の言葉としてほとばしったのだった。

しかしこのような状況の中で、宇宙的な偉大な兄弟性ゆえに神を賛美するように何が私たちを仕向けたのだろうか？ 私たちの混乱の中で、理論はもはや何も通じなかった。そこに避難を探すのは無駄だった。私たちに残っていたのは、そして私たちの目に評価できないほど価値があったのは、あなたは何某の仲間だと証する忍耐のそして友情のジェスチャーである。あなたのように苦悩と苦悶に置かれた人たちの側からのジェスチャーは、私たちの悲惨の闇の淵を奇跡的に横切る光の光線である。これがあなたに再び顔を与え、あなたを再創造する。突然私たちは私たちが人間であることを再び知る。そして助力のジェスチャー、あなたが目的であるという友情のジェスチャーは、あなた自身がそれを他者への配慮に再びすることができ、こうして力の野蛮な国に対して別の現実を証する自由と愛を立てることが

できる。…この闇の世にもう1度神の愛がその輝きを投じる。兄弟的な人は、常に御父の証人である。彼を見る人は、御父をも見るのだ。⁽¹⁷⁾」

1人1人の愛の行ないは、キリストの受肉の進展として捉えられている。そして、フランチェスコ及び「兄弟なる太陽の賛歌」に関しては、以下のように語る。

「純粹な心を持つこと」から；

「神は太陽のようである。…神は善であり、善以外の他の何も望むことはできない。⁽¹⁸⁾」

「アッシジのフランチェスコと創造」から；

「被造物は、見られるよりも、内化されている。このように、《兄弟なる太陽》は、単純な物理的な現象ではない。それは、生きている存在である。それは目を喜ばせるだけでなく、魂に語りかけ、その象徴である至高者との関係の中に魂を置く。⁽¹⁹⁾」

「アッシジのフランチェスコと創造」から；

「私たちが夢見るのを好む自然のあらゆる要素は、私たちの深い感受性と緊密な絆を持っている。私たちはそれらを私たち自身を感じるように感じる。これらは、私たちの隠されたエネルギーの鏡である。⁽²⁰⁾」

そして、「神が神であること」「人間が神になれないこと」及び「清貧」に関しては、彼は以下のように考察している。

「アッシジのフランチェスコ：福音と歴史の出会い」から；

「フランチェスコが見出した神は、もはや教会の高位聖職者たちの神ではなく、

「夜」と「兄弟なる太陽の賛歌」

聖戦や十字軍の神ではない。…神ご自身が支配するというご自分の立場を放棄なさった。⁽²¹⁾」

「アッシジのフランチェスコと創造」から；

「権力と利益への欲は、創造されたものを2つの部分に分けてしまう。一方には、自己を絶対的な主にし、被造物の中で自分をもはや考えない人間。他方は、モノの状態に還元され、収益と権力という人間の欲に関して存在と価値を持てる被造物。アッシジのフランチェスコが告発し、拒絶するのは、まさにこの欲である。⁽²²⁾」

『兄弟なる太陽の賛歌―泉の歌』から；

「至高者への跳躍は、ここではあらゆる所有欲から浄められている。その生涯に渡ってフランチェスコは、各々の人間にある、そして神的なものを呼吸することをひそかに台無しにしてしまうこの所有欲に対して抵抗することを止めなかった。これこそ、清貧への彼の歩みの深い意味であった。すなわち、神に属するものとして神ご自身を自分のものにするものの放棄である。⁽²³⁾」

2：3 「夜」と「太陽」

以上、彼のインタビューと書物から、彼の体験及び省察を見てきた。彼の主張は、

- ・ナチスに対する抵抗として、彼は「神が神であること」すなわち「人間が神になれない」ことを主張する。
- ・フランシスカンとして、真の清貧とは、自然や人間を含め、被造物を所有しないことであると主張する。
- ・「兄弟なる太陽の賛歌」の解釈として、この賛歌に表れているのは外的な自然だけでなく、人間の内的エネルギーであるとする。
- ・ナチスの非道な行為は、人間のエネルギーが狂暴な暴力に向いた結果としている。

・「エネルギーの霊化」、すなわち、人間は自分の持っているエネルギーを自分で飼い慣らし、凶悪な向きにではなく、善いもの・神へと向かわせて暖かいものにする役目を担っていると語る。

おわりに

現代教会に問いかけるもの

プロテスタント・ルター派の牧師 D・ボンヘッファーは「神の死の神学」を説いた。「安っぽい恵み」を与える神は死んだ、私たちキリスト者は自ら十字架のイエスに従う者として生きることを説いた。

カトリック・フランチェスコ会の神父ルクレールは、「神」が「神」であることを肯定し、「人間が神になる」ことを否定した。「人間が神になること」に抵抗して、人間の持っているエネルギー（プラスにもマイナスにもなり得る。すなわち暖かさにも暴力にもなり得る）を人間 1 人 1 人が自分で飼い馴らす必要を説いた。

ボンヘッファーは悪に対して戦った。ルクレールは悪に対して抵抗した。

しかし、ルクレールの悪い行ないに対する抵抗に関して筆者は以下の疑問を感じる。

ルクレールは傷から癒されただろうか？以下のルクレールによる「フランチェスコ的喜悦」は本当だろうか？

「しかしすぐに私にこの確信が生まれました。すなわち、私の本 “Sagesse d'un pauvre” の中心にあるもので、〈神はおられる。これで十分。〉すべては、この言葉に要約されます。…私は、これこそがフランチェスコ的喜悦であると気づきました。すなわち、どのようなことが私を喜ばせるか喜ばせないか、どのようなことが私を苦しめるかそうでないかを知ることが問題ではないのです。〈神はおら

れる。これで十分。〉⁽²⁴⁾」

「神はおられる。これで十分」—これが「フランチェスコの喜びである」と筆者も思うが、しかし、「どのようなことが私を喜ばせるか喜ばせないか、どのようなことが私を苦しめるかそうでないかを知ることが問題ではない」ということは違うのではないか、逆に重要な問題であるのではないか？

筆者は、ルクレールの説く「神が神であること（人間が神にならないこと）」そして「エネルギーの飼い慣らされた人間」及び「無限に開かれた人間」⁽²⁵⁾」論には同意するが、神は私たちの喜びを望まれていると筆者は思う。喜んで生きることを神は望まれるのであって、苦しいことがふりかかっても（苦しいことは人間からによるのであって、神からよるのではない）我慢しろとか聖人になれとか神は言わない・望まないと思筆者は思う。

同じフランチェスコ会員である筆者の経験によれば、フランシスカニズムは「綺麗ごと」で終わる傾向がある。人の悪い行ないも、我慢、我慢、聖人になれで済まそうとする。自分の中のマイナス面を見ないでフランチェスコのプラス面ばかり主張し、まるで自分がフランチェスコであるかのように主張し、イエスを忘れる傾向にある。イエスは、善人だろうと悪人だろうと人間の存在を否定しないが、悪い行ないに対しては否定し怒り戦った。「悪い者を愛する」と「悪い行ないを愛する」とことは、全く異なる。筆者の見解では、悪と戦ったのは、フランチェスコ会の中でパドヴァの聖アントニオ(1190頃-1231)ただ1人である。パドヴァの聖アントニオだけが悪い行ないをする司祭たちや人々を堂々と真正面から批判し、実際に自ら行ないを持って彼らと戦った。

ところで、ヒトラーはカトリックだった。この事実をカトリック教会はもっと重く受け取るべきではないか。ヒトラーのナチスに殺されたカ

トリックの信者はたくさんいる。しかしナチスの全体主義は、カトリシズムの全体主義にも、ある一面通じるところがあるのではないか。

筆者は、プロテスタントのボンヘッファーのヒトラー暗殺計画への加担には同意できないが、しかし罪を自覚しながら「全責任を自分が取る」と言ったボンヘッファーの心は立派だと思う。

また、心理学者のエーリッヒ・フロムが指摘している問題、一番恐ろしいのは麻痺している人間の心ではなかろうか。あるユダヤ人の子供と遊んでいたドイツ人の子供の家族が、そのユダヤ人の子供がナチスに捕まって近所の強制収容所で煙になっているのを見ながら、朝食を普通に食べられる中流階級のことをフロムは指摘しているが、この「事なかれ主義」はイエスが説いた「善きサマリア人」の譬えの中の祭司やレビ人の態度ではなかろうか。ボンヘッファーは、「ナチスと戦わずして礼拝に与る資格はない」と言い切った。

筆者はカトリックでありフランチェスコ会の第3会員であるからこそ書く。ナチスの問題は過去の問題ではない。今現在も、他人の生活を盗聴し、他人のメールや論文を盗み見しそれで他人をコントロールしようとする輩がいる。自分が神になろうとし、他人から仕事を奪い自分だけに注意を向けようとする輩がいる。また、興味本位で他人の生活を盗聴し、他人のメールを盗み見している輩がいる。そういう輩が礼拝に出て礼拝を利用する。知らないふりして他者の人権を踏みにじっている。コルベ神父を尊敬しながらコルベ神父をもう一度殺している。究明究明と言いながら、自分の心を究明できない。カトリック教会及び特にフランチェスコ会員は、善とは何か・悪とは何かを識別し、善を選び悪を糾弾したパドヴァの聖アントニオの生き方を学び、生きるべきではなかろうかと筆者は考える。

注

- (1) Claudio Leonardi; “Il Vangelo di Francesco e la Bibbia di Antonio”, *Il Santo* XXII, a cura di A. Poppi, Centro Studi Antoniani, Padova, 1982 参照。
- (2) 本稿はルクレール理解のためにフランチェスコを紹介し、フランチェスコについては一般的に留まるので、この和訳は日本でよく知られている庄司篤訳『アッシジの聖フランシスコの小品集』（聖母の騎士社、1992年、pp.49-54）と川下勝『アッシジのフランチェスコ』（Century Books 人と思想 184、清水書院、2004年、pp.167-172）を引用した。どの訳か等詳細は書かないが、しかし大事なところは下記注（4）のように、一部筆者が原典から改訳した。原典は、S. Francesco d'Assisi; “Cantico di Frate Sole”, *Fonti Francescane*, III edizione, Editrici Francescane, Padova, 2011. (*Fonti Francescane* の略として、以下 FF)
- (3) 川下氏が指摘しているように（『アッシジのフランチェスコ』 p.168, p.193）, 「わけても兄弟である太陽卿と共に」の文が庄司氏の訳には欠落しているが、原典にはあるので（FF263）、筆者も川下氏の訳で挿入する。
- (4) 川下氏はここで庄司氏に従っているが、原典の “de Te, Altissimo, porta significazione”（FF263）は直訳すると「いと高いお方よ、あなたの意味を担っています」なので、筆者はここで「いと高いお方よ、あなたの意味を担っています」と直訳する。
- (5) 原典は、Éloi Leclerc, *La fraternité en héritage - Ma vie avec François d'Assise*, Éditions franciscaines, Paris, 2015. 以下ルクレールのインタビュー及び書物からの引用は、原典の頁数を記す。この原典の伊語訳 Éloi Leclerc, *La fraternità come testamento - La mia vita con Francesco d'Assisi* (Edizioni Biblioteca Francescana, Milano, 2016) も参照した。なお、和訳する際に、インタビューは「ですます」調、書物は「である」調にした。ルクレールの書物については、この *La fraternité en héritage* の後半に各書物からの抜粋があり、その書名を記す。他に、筆者は、Éloi Leclerc, *Le Cantique de Frère Soleil* -

Le chant des sources (Éditions franciscaines, Paris, 2013) を引用したので別記する。なお、その伊訳 Éloi Leclerc, *Il canto delle sorgenti* (Presenza di San Francesco 28, Edizioni Biblioteca Francescana, Milano, 2016) も参照した。

- (6) *La fraternité en héritage*, p.26.
- (7) *ibid.*, pp.26-27.
- (8) *ibid.*, p.27.
- (9) *ibid.*, pp.27-28.
- (10) *ibid.*, p.28.
- (11) *ibid.*, pp.29-30. “ ” は筆者が挿入。
- (12) *ibid.*, p.38.
- (13) *ibid.*, p.46. (FF70, 261 他) は筆者が挿入。
- (14) *ibid.*, p.47.
- (15) *ibid.*, p.48.
- (16) *ibid.*, pp.48-49.
- (17) *ibid.*, pp.63-65. この文章の出典は、「魂の夜の言葉」 “Le langage de la nuit de l’âme”, *Le Cantique des créatures ou les symboles de l’union*, réédité, Éditions franciscaines, 2014 より。なお、伊訳 *La fraternità come testamento*, p.39 では “La notte dell’anima” となっているが、原典 *La fraternité en héritage*, p.51 では “Le langage de la nuit de l’âme” となっており「言葉 Le langage」という言葉もあるので原典に従う。
- (18) *La fraternité en héritage*, p.180. この文章の出典は、「純粋な心を持つこと」 “Avoir le cœur pur”, *Sagesse d’un pauvre*, Nouvelle édition DDB, 2015 より。なお、伊訳 *La fraternità come testamento*, p.118 では “Il cuore puro” となっているが、原典 *La fraternité en héritage*, p.171 では “Avoir le cœur pur” となっており「持つこと Avoir」という言葉もあるので原典に従う。
- (19) *La fraternité en héritage*, p.142. この文章の出典は、「アッシジのフランチェ

スコと創造」 “François d’Assisi et la création”, *Évangile aujourd’hui*, n° 91, 1976.

- (20) *La fraternité en héritage*, p.142. この文章の出典は、注 (19) と同じ。
- (21) *ibid.*, pp.96-97. この文章の出典は、「アッシジのフランチェスコ：福音と歴史の出会い」 “François d’Assise : Une rencontre de l’évangile et de l’histoire”, *Évangile aujourd’hui*, n° 115, 1982.
- (22) *La fraternité en héritage*, p.138. この文章の出典は、注 (19) と (20) と同じ。
- (23) *Le Cantique de Frère Soleil - Le chant des sources*, p.27.
- (24) *La fraternité en héritage*, p.43.
- (25) *Le Cantique de Frère Soleil - Le chant des sources*, p.26 参照。本稿では紙幅の都合上、ルクレールのこの神の無限との関係における人間論の展開まで論じることができずその紹介に留まった。